

ドイツ社会民主党の再建：1945～1947年

——クルト・シューマッハーの指導を中心に——

安 野 正 明

はじめに

戦後ドイツ史研究者の関心を1960年代に至るまで最も強く引きつけた政治外交史の問題は、ドイツの東西分断・再統一に関する問題であった。それは無条件降伏をし分割占領下に置かれたドイツ人の主体的に関与しうる問題ではないとされたので、まず連合国の対独占領政策・冷戦研究という枠内で研究が先行した¹⁾。しかし、その際には占領下にあったドイツ人は歴史形成の主体というよりは客体であり、「ドイツ人不在のドイツ史」となる傾向がなかったとは言えない。ゆえに、西ドイツ成立前の軍政期(1945～1949年)のドイツ側の政治構想・運動の分析と位置付けが1949年以降のアデナウアー時代の研究に比しても遅れ、「欠落の一章」として残ってしまうという傾向があった。「1945年から1949年までの占領統治下のドイツ政治は驚くほど長く研究の死角となっていた²⁾と西ドイツの現代史家ハンス・ペーター・シュヴァルトが述べたのは、以上のような動向を背景として吟味されるべきである。それは東西ドイツ分離独立に至る4年間の過程を歴史的に分析するにあたり、ドイツの主権喪失・連合国の対独占領政策による絶対的拘束を前提としてなお、「勝者のドイツ政策」だけでは捉え切れない歴史形成推進力を「敗者のドイツ政策」において考察することが必要であるという示唆を、我々に与えてくれる。1945～1949年の軍政期におけるドイツ人の未来を志向した政治構想・運動は、1949年9月西ドイツ成立へと収斂して行く過程においてどのような役割を演じていたか。占領期の展開は、1949年以後のドイツ史をいかに規定していたか。

シュヴァルト論文により触発された以上のような問題意識を基底に置きながら、本稿では議論の直接の対象としてはドイツ側の歴史形成主体として、戦後初代党首クルト・シューマッハー Kurt Schumacher³⁾指導下のドイツ社会民主党 (SPD) を取り

上げる。本論文で明らかにしたい論点は次の三点である。

- (1) ソ連地区 SPD の消滅を伴いながらも SPD は1946年5月にはすでに中央指導部を樹立できたが、いかにしてそのような早期再建が可能となったか。一年間の党再建過程とそこに内包された問題は、また、被占領者であるドイツ側の一主体としてのSPDによって自発的に提示された理念と行動は、いかなる実質を持っていたか。
- (2) 早期再建された SPD はライヒ全体の指導権要求を掲げ、シューマッハーの下で積極的活動を展開した。しかし、1949年8月の第一回連邦議会選挙ではキリスト教民主・社会同盟 (CDU/CSU) に敗北し、野党の地位を割り当てられた。それに至る過程とそれを不可避にした条件は。
- (3) SPD 指導者としてのシューマッハーのリーダーシップの態様・行動様式はどう評価されるべきか。

本稿では以上に提示した論点を吟味するため、1945～1946年5月の中央指導部樹立までのSPD再建過程とシューマッハーの再建構想、SPDとカトリック左派との関係を中心に論じたいと思う⁴⁾。

- 1) 参照、佐瀬昌盛「西ドイツにおける冷戦研究」『国際問題』170号、1974年、22-34頁。
- 2) Hans-Peter Schwarz, *Vom Reich zur Bundesrepublik: Deutschland im Widerstreit der außenpolitischen Konzeptionen in den Jahren der Besatzungsherrschaft 1945—1949* (Neuwied/Berlin, 1966), S. XXXI. シュヴァルトのこの著作は、1945～1949年の重要性・西ドイツ分離国家成立までのドイツ側の運動、役割の意義に注意を喚起し、戦後ドイツ政治外交史研究史上画期をなした業績である。なお、上記書の延長線上に位置付けられ、議論を簡潔にまとめた論文として、Schwarz, “Die außenpolitischen Grundlagen des westdeutschen Staates,” in: Hans-Peter Schwarz und Richard Löwenthal (Hrsg.), *Die zweite Republik* (Stuttgart, 1974), S. 27-63.

- 3) シューマッハーは1895年西プロイセンのクルムで生まれ、1914年第一次世界大戦に志願して東部戦線に赴いたが同年12月負傷して右腕切断、1918年 SPD 入党、ドイツ革命期にはベルリンにあって多数派社会民主党に属した。戦後はシュトゥットガルトを根拠地に1924年よりヴュルテンベルク州議会議員、1930年より国会議員として党指導部の「寛容政策」を批判し、SPD右派に位置して反ナチ運動の先頭に立った。1933年7月逮捕され、1943年まで各地の強制収容所を転々とした。1943年3月よりハノーファーに強制滞在。シューマッハーの伝記としては、たとえば、Arno Scholz/Walther G. Oschilewski (Hrsg.), *Turmwächter der Demokratie: Ein Lebensbild von Kurt Schumacher*, Bd. 1 (Berlin, 1954). Waldemar Ritter, *Kurt Schumacher* (Hannover, 1964). Lewis J. Edinger, *Kurt Schumacher* (Stanford, Calif., 1965). Heinrich G. Ritzel, *Kurt Schumacher* (Reinbeck bei Hamburg, 1972).
- 4) ここで提示した基本的問題意識に従えば、1945～1949年を議論の対象とすべきであるが、紙数の関係上1948年以後の展開を本稿では断念せざるを得ない。また1945～1947年に限定しても、提示された具体的論点には基本的ないし部分的に答え得ると思う。

I ドイツ社会民主党の再建過程 1945年5月～1946年5月

本稿では一年間の再建過程を便宜上三つの時期に区分して議論を進めたい。

1 1945年5月～1945年7月

SPD再建の核としてはハノーファー・ベルリン・ロンドンの三都市にあったグループが並列的に挙げられるが¹⁾、そのなかで終戦直後真に「再建の核」と呼ばれるにふさわしい規模と陣容を整えて迅速に結集したのはベルリンのグループであった。最初は複数グループで別々に行動していたオット・グローテヴォール Otto Grotewohl、マックス・フェヒナー Max Fechner、グスタフ・ダーレンドルフ Gustav DahrendorfらベルリンSPDは、6月になって一堂に会して統一的活動方針を論じた。しかし、SPD再建グループとして活動するか、ドイツ共産党(KPD)との統一政党結成準備委員会として機能すべきか、また誰が優越した指導権を握るかなどをめぐって議論は紛糾した。この混乱のなかでベルリンSPDに「団結」をもたらした社会民主党「中央委員会」を成立せしめたのは、彼らにとって寝耳に水で

あった6月10日のソ連軍政府の布告による政党活動自由の許可と、それに即呼応した6月11日のKPDの結党声明(Aufruf)²⁾が与えた衝撃であった³⁾。

以上のような経緯で成立した自称「中央委員会」が、結党声明を発してその存在を明らかにしたのは6月15日であった。成立直後のベルリンSPDの基本方針を知る上で最重要史料であるこの結党声明は、「現状におけるドイツ人の重大な利益は、反ファシズム・民主主義的政治体制と人民にあらゆる民主主義的権利と自由とを保証する議会制民主主義との確立であるとする、1945年6月11日のKPD中央委員会の声明を我々は心から歓迎する」⁴⁾と前文で宣言した。さらに末尾では「我々は何よりもドイツ労働者階級の組織的統一を基礎とした新秩序のために闘うつもりである」⁵⁾と強調しており、KPDとの統一行動を越えた組織統一・社会主義統一政党への強い希求が特徴的である。かくの如きベルリンSPDの再建理念を根本的に規定していたのは、ヴァイマル時代の労働者階級の分裂・抗争がヒトラーの政権掌握を阻止できなかった一大要因だったのではないかという悔悟の念であった。だがそれだけではなく、1934年1月の亡命SPD指導部による「プラハ宣言」の精神、1943年5月のコミンテルン解散が、KPDとの統一促進に影響を与えていた⁶⁾。

6月19日、それまでSPDとの接触を避けてきたKPDの最高実力者ヴァルター・ウルブリヒト Walter Ulbricht は「中央委員会」と会談した。この席で彼は、早期の組織統一は新たな分裂の芽を内包させるとしてSPD・KPDの統一政党結成を拒否し、代案としてソ連地区行政区各レベルでの統一行動委員会の設置を提案した。「中央委員会」はソ連軍の占領政策を背景としたKPD提案を受諾するより他に選択肢はなかった。社共両党にソ連地区の自由民主党(LDP)とキリスト教民主同盟を加え、7月14日には民主主義勢力の上からの統一的組織体である「反ファシズム・民主主義政党統一戦線」が成立した⁷⁾。その一方で、「中央委員会」は成立後間もなく、ソ連軍政府からソ連地区全体でSPDの指導団体として活動する権限を与えられた⁸⁾。ソ連軍政府によるお墨付きを権威の源とした「中央委員会」によるSPD再建は、ソ連地区が歴史的伝統的にSPDの強力な地盤であったことも手伝って目覚ましい成果をあげ、1945年10月末までに30万の党員を結集し

た⁹⁾。しかし、ベルリンの「中央委員会」による中央集権的組織再建は、ソ連軍政府に過度に依存していた。それは短期的には「中央委員会」の隆盛をもたらしたが、長期的にはソ連地区 SPD の自立性を失わせる原因となった。

第三帝国時代に SPD の灯をかりうじて守っていた亡命指導部は、ハンス・フォージェル Hans Vogel、エーリヒ・オレンハウアー Erich Ollenhauer を中心として1940年以来ロンドンに滞在していた。彼らも国外から SPD 再建に影響を与えようと、1945年3月に1933年選出の SPD 指導部の生存者で「ドイツ国民へのアピール」を出そうと試みたが、その企ては挫折した¹⁰⁾。ロンドン・グループは独力では「再建の核」とはなり得ぬことを悟らざるを得なかった。しかし、彼らは1933年以来 SPD の代表としての「委任」(Mandat)を保持し、亡命中にイギリス労働党を始めとする西欧・北欧社会主義政党と太いパイプを有していた点で無視できぬ存在であった。ゆえに、ドイツ国内で SPD 再建の主導権を握らんと欲した人々にとって、ロンドン・グループを自己の陣営に加えることには死活の重要性があった。フォージェルらと最初に連絡を取ったのはグローテヴォールの再建グループであった(1945年4月)。しかし、ロンドンでは終戦前にソ連および KPD とは明確な一線を画しソ連地区には戻らないという指導者の合意がすでに確立しており、ベルリンに戻るようというグローテヴォールの要請は拒絶された¹¹⁾。

一年後に SPD 党首になるシューマッハーは、ハノーファーで敗戦を迎えた。ソ連とは異なり、西側占領国は大戦終了直後ドイツ人の政治活動を厳しく禁圧し、政党活動の許可は当分の間与えない方針を明確にしていた。しかし、SPD 再建活動は西側地区でも第三帝国崩壊の日から始まっていた。シューマッハーはすでに1945年5月6日、ハノーファー近郊の同志を前にして「我々は絶望しない!」¹²⁾と題する長大な演説を行い、ハノーファーの SPD 再建グループの指導者としての地位を確立した。が、占領軍による政治活動禁止命令という外圧的条件のゆえに SPD 再建グループとして公然と活動することはできず、「クルト・シューマッハー博士事務所」なる看板を掲げざるを得なかった¹³⁾。

1945年5月という SPD 再建の出発点においてシューマッハーは、ベルリン SPD と真っ向から対立

する一つの再建方針を明確にしていた。彼は、理想や願望としての社共統一政党には理解を示し、それを求める動きの弱くないことを認めながらも、現実問題としては以下の如く断じた。「社会主義者と共産主義者との統一政党は、権力政治的状况や外交的結合関係のゆえに不可能である。両者を分かち境界線は、共産主義者が強大な戦勝国の一つ、つまり国家としてのロシアやその外交政策目標と固く結合していることにある。……我々は、ある外国の帝國的利害によって独裁的に取り扱われる道具となることはできないし、なるつもりもない」¹⁴⁾。ヴァイマル時代に植え付けられたソ連に対する敵対心とドイツ人としてのアイデンティティを強烈に自覚した国民意識に立脚して、シューマッハーが SPD 再建の出発点から抱いていたかくの如き確信は、ベルリン SPD との対立・分裂を不可避とし、一方でロンドン・グループとの協力への道を開いた。つまり、SPD 再建にあたっては対ソ関係を視野に収めた上で、KPD との関係・統一政党問題にどのように対するかという問題が、他の諸問題を圧倒する比重を持って SPD 内で浮上したのである。

ところで、5～7月の西側地区での SPD 再建運動の展開は、シューマッハーを深刻に憂慮させたと思われる。というのは、西側地区でも終戦直後の SPD 再建運動において、SPD・KPD 統一への動きは決して小さくなかったからである。たとえば、英国占領下にあったハンブルクでは、政党活動禁止下にあって5月上旬には SPD と KPD との組織統一が「社会主義自由労働組合」(SFG)として実現し、6週間余の活動期間に5,000人の参加と10万マルクの資金を集めた。しかし、労働組合として許可された SFG の政治的活動に SPD の一部(特に中高年層)やイギリス軍政府は警戒の念を強くし、6月20日に SFG はイギリス軍政府により解散を命ぜられた¹⁵⁾。だがこの圧力にもかかわらず、「統一! 統一! 分裂と兄弟げんかをくり返すな!」という一項を含む統一行動綱領が7月24日にハンブルクの KPD と SPD との間で合意された。注目すべきはこの時点で、SFG 結成の時とは異なり KPD は組織統一には慎重な態度を取るようになり、統一行動綱領をソ連地区で7月14日に成立した「反ファシズム・民主主義政党統一戦線」を範とした統一戦線結成に利用せんとしたことである。ハンブルク KPD のこ

の変化は、5～7月の間にその指導権が、戦争中もハンブルクに在住していた共産党員からモスクワ帰りの支配するベルリンの中央指導部に移行したことを示す。この変化は KPD のソ連からの独立性に対する嫌疑を SPD 内に強くし、SPD 内の即時合同推進派を孤立せしめ、高揚した社共統一運動を1945年夏を峠に次第に冷却化の方向に導いていった¹⁶⁾。

しかしそれでも、統一政党結成には否定的だが統一行動・緊密な協力は維持すべきだとする傾向、広義の「統一」運動は根強く、一般党員のすそ野まで広がりを持っていた。「統一」運動は地域的多様性・特殊性を示しながらもハンブルク以外の都市、フランクフルト・ドルトムント・ミュンヘン・デュースブルクなどにも存在し、統一行動綱領も作成された¹⁷⁾。だがここで確認すべきは、1945年夏までの統一政党即時結成に対する KPD の消極的対応が、組織統一をはやる SPD 急進左派を押えて SPD を分裂させず独立組織として残り発展させたことにより、結果的には秋以降のシューマッハーによる SPD 再建にとって有利な状況を生み出していたという事実である。

2 1945年8月～1945年10月

実質的な SPD 再建活動は、西側地区でも活動許可が降りる前に各地で自発的に開始されていた。しかし、ハノーファー近郊を越えたシューマッハー主導下の西側地区 SPD 再建と称すべき活動が、本格的に軌道に乗るのは8月に入ってからである。シューマッハー・グループが公的にその存在を明らかにしたのは、8月20日付でイギリス軍政府にあてた「政党活動許可願」¹⁸⁾であった。そこで彼は自らのグループを、SPD の1つの Ortsverein (SPD 組織の最下部最小単位)として申請書を書かざるを得なかったのである。「中央委員会」を自称することとできなければ、結党声明を発することもできなかった。

西側地区再建グループの多くは、当時すでにヴァイマル時代の SPD 組織を原型にその地域の1933年以前からの同志的絆を基礎に再建されつつあったが、必ずしも SPD 全体の指導権要求には熱心ではなかった。8月末にシューマッハーは、確認できた再建グループに「政治的方針」と称する文書を送付した。それは、ソ連の西方進出に対する脅威論、オーデ

ル・ナイセ国境線不承認と並んで、KPD の「民主主義」に対する信仰告白は粉飾であると決めつける社共統一反対論を骨子としていた。この「政治的方針」は敗戦直後の混乱期にあって確固たる指針なく動揺していた各地の再建グループを引き付け、「統一」運動にくさびを打ち込んだ。彼は「政治的方針」に添えて、10月5～7日に開催すべく準備を進めていた再建グループ合同会議の招待状を同封した。招待状はロンドンとベルリンにも送られ、9月はその準備に全力が傾注された¹⁹⁾。

10月5日ハノーファー近郊ヴェニヒセン Wennigsen に参集した公式代議員は、英占領地区の10グループから3人ずつ派遣された30人であった。その上に、米占領地区の9グループの代表、「中央委員会」からグローテヴォール、ダーレンドルフ、フェヒナーの3人が参加した。ロンドンからも英労働党の助力によりオレンハウアー、フリッツ・ハイネ Fritz Heine、エルヴィン・シュトレ Erwin Schoettle の一時帰国が実現し、まだドイツ人の政党活動が禁じられていた仏占領地区からも参加者はあった。代議員や招待客のなかにはかつての SPD 分派、社会主義労働者党 (SAP) や国際社会主義闘争同盟 (ISK) の活動家も姿を見せていた²⁰⁾。

会議で議論の中心となったのは、SPD 再建の原則となる組織問題、具体的には KPD との関係・将来の中央指導部の構成・亡命者グループに対する態度であった。これらの問題に対して基調演説でシューマッハーは、「唯一の労働者政党として発展できるかもしれないという KPD の夢が現実によって完全に不可能となったので、KPD は偉大な献血者 (Blutspender) を求めざるを得ない。その処方せんが、KPD の指導を SPD に強制せんとする統一政党である」²¹⁾、「ドイツ人の政治という意味では、共産党は無用の存在である」²²⁾、あるいは「たとえベルリンの『中央委員会』をソ連地区に権限ありと考慮するとしても、西側地区にはいかなる党指導部も樹立するつもりはない」²³⁾と述べ、社共統一政党に反対し「中央委員会」の SPD 全体に対する指導権要求にあらかじめ釘をさした。

ソ連地区 SPD を代表してグローテヴォールはベルリン SPD の統合した組織と党員数を背景に、シューマッハーに対してライヒ・レベルで「中央委員会」の暫定的指導権を承認するように迫った。シュ

ーマッハーは断固としてその要求を退け、西か東かを二者択一するが如き議論は白熱化し、会議監視の英軍将校によって中止を命ぜられた。しかし、6～7日にかけて監視の目の届かぬ所でシューマッハーとグローテヴォールの間で次の合意が達成された。

①ドイツ再統一が許されるまで、SPDの組織的統一は与えられない。②それまで、ベルリンの「中央委員会」は東側地区のSPD指導部と見なされるが、西側三占領地区のSPD再建の政治的委任を受けるのはハノーファーのシューマッハーである。③共通の利害に関わる問題については両者の間で継続的な意見交換・調整が行われる。以上3項目の合意に占領軍当局の干渉はなかった²⁴⁾。会議の招集形態により、当時最大最強の再建グループであった「中央委員会」は少数派となり、合意の内容は勢力の弱かったシューマッハーがグローテヴォールの主張を押えた形となった。

ヴェニヒセン会議は東西占領地区再建グループが一堂に会した最初にして最後の場であったというだけでなく、次の理由によりSPD再建過程の最重要の節目と位置付けられる。第一に、ヴェニヒセン会議を機に、シューマッハーは西側地区SPD再建の中心人物たる存在を内外に明らかにできた。第二に、この会議を契機にSPDの東西地区分極化、統一派と反統一派の分極化に拍車がかかり、それぞれ別個の再建行程を歩む傾向が強くなっていったのである。

3 1945年10月～1946年5月

10月初頭SPDとの100%協力を主張していた「中央委員会」最左派はダーレンドルフであり、彼はヴェニヒセンでも「KPDの民主主義的言辭が単なる粉飾であると言うのは正しくない」と主張した²⁵⁾。他方グローテヴォールはこの時点では終戦直後とは異なり、KPDとの即時組織合同には慎重な態度を取るに至っていた。この背景には、ソ連軍政府の占領政策と連係したKPDの統一戦線内での優越した発言力、地方組織で良く訓練されたKPD活動家に圧倒されているSPDの現状に鑑み、「信頼に満ちた協力のための前提は欠如している」と書いたグニフケのレポートに象徴されるベルリンSPDの方向転換があったのである²⁶⁾。すなわち「中央委員会」の大勢は、1945年夏から秋にかけて、党中央指導部定立後ライヒ・レベルでの社共統一を最終目標とし

ながらも、占領地区単位での組織統一は避けて活動の最優先目標を西側地区再建グループとの連絡強化・西側への浸透に置く方向へ固まっていた。彼らの行動の前提には、ポツダム協定に約束された再統一ドイツの実現があった。彼らの活動が、ソ連地区だけに限定されることを前提にはしていなかった。

「中央委員会」はシューマッハーの影響力のまだ支配的ではなかった南ドイツ（アメリカ占領地区）のレーゲンスブルクに有給代理人を雇い、そこを拠点に西側地区への浸透を試みた。11月17～28日にかけてグローテヴォールとダーレンドルフは、南ドイツ諸都市に遊説旅行をし支持を求めた。しかし、それは西側地区での影響力拡大という「中央委員会」の所期の目的を何ら果さなかった。彼らの活動はレーゲンスブルクなど一部の地域を除けば極めて限定的であり、シューマッハーを屈服させることができないうちに、足元であるソ連地区での事情の重大な変化に「中央委員会」は存立の危機に立たされつつあった²⁷⁾。

「重大な変化」とは、1945年秋になると一転して今度は夏までとは逆に、KPDがSPDとの組織統一早期実現を主張しだしたことである²⁸⁾。KPDの対応の変化の理由には、国際関係上の要因も促進剤として重要で無視はできぬ。しかし、基本的動機としては、SPDの一般党員数（活動家数ではない）のKPDを凌ぐ増大傾向、自由選挙でのSPD勝利の確実性が、左翼運動の主導権を再びSPDに握られるかもしれないとKPDの不安をかきたてたという国内的要因があげられる²⁹⁾。

KPDは1945年10月以来、「統一行動を親密にするため」のSPD・KPD合同会議を要求していた³⁰⁾。12月17日、「中央委員会」の代表はハノーファーを訪れ、シューマッハーを「中央委員会」に加入させようと説得を試みた。少なくともソ連に対する非難の調子を下げさせようとしたが、ハノーファー・グループは協力を拒否した³¹⁾。

グローテヴォールらはKPDの要求に抗し得ず、ソ連地区SPD・KPD30人ずつの代表からなる「60人会議」を12月20～21日ベルリンで開くことに同意した。この「60人会議」の公式決議³²⁾を読む限り、両党は異論なく手を携え社会主義統一政党結成へ突進する用意があったかに見える。しかしそれとは裏腹に実際の会議では、KPDの統一政党要求に対す

る「中央委員会」の否定的見解が強く表明されていたのである。基調演説³³⁾に立ったグローテヴォールは、5～6月に KPD が SPD の統一政党要求に消極的であった一連の事実を暴露した³⁴⁾。もともと社会主義統一政党のイニシアティブは SPD 側にあったことを主張した上で、彼は統一行動の経験を通じて明らかになった KPD の「SPD に対する非民主主義的圧力」に苦言を呈した³⁵⁾。続けてグローテヴォールは、「KPD の提案である地方選挙に備えての共同リストは正しい道ではない」³⁶⁾と述べ、両政党の力関係を明らかにする競争選挙を望んだ。統一政党についても「統一がソ連地区で最初に樹立されれば、ドイツ労働者階級の統一は不可能となるかもしれない」³⁷⁾と述べ、占領地区単位の統一は明確に拒絶したのである³⁸⁾。しかし、「労働者階級の統一を基礎としたドイツ」の実現を願うグローテヴォールの基本的立場が変化したのではない³⁹⁾。彼の発言は、民主主義的諸原則に立脚したドイツ全体での SPD・KPD 統一を放棄するのではなく、強く願うがゆえの懸念から導かれたと考えるべきである。彼の意図していた統一は、統一後の SPD の KPD に対する優位確保を絶対の前提としていた。それは一貫しており、ライヒ・レベルでの両者の力関係を考慮すれば不可能な構想とは思えなかった。彼にとって、統一政党がソ連地区だけで成立しても無意味に等しかった。1945年12月は、統一政党に対する両党の対応が5～6月の時点とは正反対となったのである⁴⁰⁾。

「中央委員会」は、各地方組織に1946年1月12日付で伝達した「60人会議」決議の内容説明で、次のように述べた。「ドイツ労働者階級の統一は必要である。それは、ドイツ全体の党大会によって決定されるであろう。それまで両党は独立である」⁴¹⁾。このような抵抗の姿勢は、1月15日の「中央委員会」決議⁴²⁾にも表明されていた。しかしグローテヴォールの抵抗は、西側地区 SPD に有力な理解者を有して初めて貫徹可能であった。

が、「中央委員会」にとって不幸なことに西側地区 SPD、特にシューマッハーは「60人会議」を以て「中央委員会」が KPD に完全に従属してしまったと考えた。そして彼はこの「誤解」を、西側地区 SPD 全体に影響力を拡大し「受託者」(Beauftragter)から「指導者」(Führer)へと上昇するために最大限に活用するのである。「60人会議」のアピ

ールは西側地区にも向けられていたので、シューマッハーは迅速に反応した。彼は1946年1月3～4日ハノーファーにイギリス地区 SPD 再建グループの代表者を召集して、ソ連地区 SPD の決定には拘束されずに KPD との合同はいかなる条件の下でも拒否するという決議を採択させた⁴³⁾。この決議に対するコメントでシューマッハーは、「東側における強制合同はもはや阻止できない」⁴⁴⁾と断定し、KPD との平等同権の協力などは存続し得ず、占領初期の政治活動の自由は急速に消滅しつつあるという現状認識を示した。さらに対ソ関係に言及し、「明白であるのは、もし許されるのであればロシアがドイツ全体を衛星国として扱いたいと考えていることであり、もし西側地区 SPD が一方的に親ロシア的政策を取るのであれば、ドイツ全体が衛星国家化するという展開はあり得ぬことではない」⁴⁵⁾として、再建 SPD の第一の使命をソ連の膨張に対する防壁たることと強調した。

シューマッハーは迷いなくその確信に従って行動し、組織結集を進めた。彼は1月6日から一週間アメリカ地区を遊説して「60人会議」アピールに動揺するグループを説得した。分割占領による境界線は、西側 SPD の混乱と左傾化を最小限度にした。合同期日を定めての KPD の強引かつ性急な合同要求、1945年夏までの社会主義統一政党に対する慎重な態度からの急で不自然な転換、ベルリン中央指導部の統制下に置かれた西側 KPD の画一的対応は、西側地区 SPD 再建グループのほとんどすべてを即時合同には慎重にさせ、シューマッハーの統一政党反対運動の成功を円滑かつ容易にした⁴⁶⁾。

1945年の末ごろからソ連軍政府の圧力は強まった。1946年1月末にソ連軍政府ジュコフ元帥は KPD のピークとグローテヴォールを招き、後者に社会主義統一政党結成を強く要請した⁴⁷⁾。追いつめられたグローテヴォールは1946年2月8日ブラウンシュヴァイクでシューマッハーと会談したが、シューマッハーはただ「ソ連地区 SPD の解散を宣言せよ」と迫るのみであった。それに対しグローテヴォールは「時すでに遅し」と答えたのである⁴⁸⁾。このブラウンシュヴァイク会談の完全決裂によって、ソ連地区単位の SPD・KPD 合同に踏み切らざるを得ぬというグローテヴォールの決断は最終的に下された⁴⁹⁾。彼は2月10日に1月15日の決議を逆転破棄さ

せ、ソ連地区単位の社共統一政党結成を呼びかける決議を採択させた⁵⁰⁾。ウルブリヒトとピークの誘いは「完全平等同権という原則を保証しての合同」であったが、シューマッハーの方は同志としてよりもむしろ対抗者としてのベルリン SPD を抹殺せんとした「解散要求」だったからである。つまり、シューマッハーの非妥協的反統一政党活動は、独自の組織を維持せんと苦慮していたソ連地区 SPD を、最終的に KPD 側に追いやるのに大きな役割を果たしたのである。

西側地区では1946年2月になって組織力に秀でた党官僚を擁するロンドン・グループ（オレンハウアー、ハイネら）が帰国を許され、シューマッハーに合流した。勢力を強化したシューマッハーは、KPD との統一政党即時結成に熱心な党員を除名しながら組織統合を進めた。彼は、2月27日にはオフエンバッハで開かれたアメリカ地区 SPD 会議で144対6の大差を以て KPD との統一政党を拒否するという決議を得て、西側地区 SPD 指導者としての地位を固めていった⁵¹⁾。

同時期、「中央委員会」はソ連地区 SPD に対する統制力を失っていた。ソ連地区では SPD・KPD の組織統合が強行され、抵抗する社会民主党員はソ連軍により逮捕・投獄、あるいは追放の憂き目にあった⁵²⁾。たとえば、「ブーヘンヴァルト宣言」の一起草者でもあったチューリンゲン SPD 委員長ヘルマン・ブリル Hermann Brill は追放処分を受けた⁵³⁾。また、かつては KPD と合同推進の最左翼にあった「中央委員会」幹部ダーレンドルフも、英地区への亡命によって「KPD の民主主義的言辭は単なる戦術ではない」というヴェニヒセン会議での自らの発言を撤回せざるを得なかった⁵⁴⁾。これら一連の事実、ソ連地区単位の短期間に進行した SPD・KPD 合同が「歴史的必然性」に基づくというよりも、当事者多数の具体的意志表明が押えられたまま進行した「強制」的側面が存在したことを示している⁵⁵⁾。ソ連地区 SPD・KPD 合同過程は西側地区 SPD 多数の胸に、1945年5月11日の KPD 結党声明にうたわれていた「民主主義」尊重の言辭は SPD を欺くための粉飾ではないかという疑いと、KPD に対する不信感とを刻んでしまったのである。

しかし、それは KPD との統一問題について、西側 SPD 全体をして一挙に頂点に立つ指導者の如き

非妥協的態度を取らしむるに至ったと判断すべきではない。当事者による意志表示が行われたのは四大国共同管理下にあったベルリンで、シューマッハーの指導と英米の支持を取りつけたフランツ・ノイマン Franz Neumann を中心とする反「中央委員会」グループの提案により、1946年3月31日統一政党問題に関するベルリン SPD 全員投票が実現した。その投票結果⁵⁶⁾は、「現時点で KPD との統一政党は拒否するが、協力関係は維持したいし、兄弟げんかは再びくり返したくない」というベルリン SPD 一般党員の意志を表明していたと判断される。それはベルリンだけの孤立的意志ではなく、当時 SPD 全体の最大公約数的見解であったと考えられる。が、シューマッハーの再建活動もソ連地区での展開も「最大公約数」を代表せず、むしろそれを双方とも抑圧し、ドイツ社会主義勢力の分裂・抗争継続への道を広げたのである。

1946年4月20日、ソ連地区 SPD 党大会が開かれ単一政党としての SPD はソ連地区では消滅し、翌日ドイツ社会主義統一党 (SED) が成立した⁵⁷⁾。以後唯一の SPD となった西側地区 SPD の党大会は、5月9～11日ハノーファーで開催されると通告された。その時、シューマッハーが SPD 委員長に就任することに疑問を抱く者は誰もいなかったのである。西側占領国は SED 許可を当事者全員投票の結果によって決めると布告したが、全員投票は行われることなく西側地区の SPD と KPD は独立政党として残った⁵⁸⁾。

終戦直後西側地区でも広義の「統一」を自然発生的に志向した SPD 再建は、一年後「反統一」を絶対の方針とする指導者を戴く政党として再建されてしまった。結集した党員の8～9割はナチス時代以前からの党員であると見積もられ⁵⁹⁾、その限りにおいて「連続性」の強い政党として再建されたのである。しかし、西側地区では1945年秋まで優越した指導部を持たず、1933年以前の組織と人材・同志的 (kameradschaftlich) 結合関係を基礎に分権的再建が進行し、最後にシューマッハーが「反統一政党」という屋根をかけて組織を結集するという過程をたどった。ゆえに、1946年当時の各地区組織 (24 の Bezirk) は人事・財政・具体的活動の分野においてシューマッハー指導部に対し独立的権限を有しており、ヴァイマル時代の如き中央集権的で強固な党官

僚組織は再建されてはいなかった⁶⁰⁾。

ソ連地区 SPD の消滅を伴った SPD 再建が、以後の SPD の発展とドイツ政治に及ぼした影響は何であったか。第一に、短期間での西側地区 SPD におけるシューマッハーの指導者としての台頭・権威確立とソ連地区 SPD の消滅とは表裏一体の関係にあったが、1946年5月以後 SPD はその歴史的伝統的地盤であったエルベ河以東の組織・党员（1946年4月で約76万人⁶¹⁾）を喪失した。西側地区に SPD の活動は限定されたが、そこはカトリックが多数を占め旧中央党の安定した地盤を多く含み、歴史的に SPD に有利とは言えない地域であった。第二に、1946年4月ソ連地区での SED の成立によって、イデオロギー的にも外交政策的にも東方志向（Ostorientierung）を強硬に主張する勢力は SPD 内に占めるべき場所を失った。SPD は原則的に明確な西方志向を示す社会主義政党として再建された。第三に、SED 成立を機に以前はライヒ全体で展開されたドイツ政治の最大の混乱・不安定要因の1つであった左翼陣営の分裂・抗争の主軸は、徐々に西の SPD と東の SED の対立というエルベ河をはさんだ東西の地域的対立に転換した⁶²⁾。西側地区で「統一」運動が最終的に崩壊するのは1948年であるが⁶³⁾、SPD 再建にとっても戦後ドイツの社会民主主義と共産主義との関係の帰趨を考える上でも、戦後一年間が最重要の時期であったと言って過言ではない。

- 1) 仲井斌『西ドイツの社会民主主義』（岩波書店、1979年）、17頁。佐瀬昌盛『戦後ドイツ社会民主党史』（富士社会教育センター出版局、1975年）、5頁。
- 2) “Aufruf des Zentralkomitees vom 11. Juni 1945,” in: Ossip K. Flechtheim (Hrsg.), *Dokumente zur parteipolitischen Entwicklung in Deutschland seit 1945* [以下 *Dokumente* と略] Bd. 3 (Berlin, 1963), S. 313-319.
この声明で KPD は、「我々は、ソ連の制度をドイツに強制するやり方は誤っていると考えている。なぜなら、その道はドイツの現在の発展条件に適応しないからである」（S. 316）と明言し、「反ファシズム・民主主義政党ブロック」の結成を呼びかけていた。
- 3) Frank Moraw, *Die Parole der “Einheit” und die Sozialdemokratie* (Bonn-Bad Godesberg, 1973), S. 80 ff. Albrecht Kaden, *Einheit oder Freiheit: Die Wiedergründung der SPD 1945/46* (Berlin/Bonn, 1980), Nachdruck der 1964 erschienenen 1. Auflage, S. 22-49.

- 4) “Aufruf vom 15. Juni 1945 zum Neuaufbau der Organisation,” in: Flechtheim, *Dokumente*, Bd. 3, S. 2.
- 5) Ebenda, S. 3.
- 6) Kaden, a. a. O., S. 34 ff.
- 7) Moraw, a. a. O., S. 92 ff.
- 8) Institut für Marxismus-Leninismus beim ZK der SED, *Die Vereinigung von KPD und SPD zur Sozialistischen Einheitspartei Deutschlands* [以下 Institut für M-L, *Die Vereinigung von KPD und SPD* と略] (Berlin(O), 1976), S. 115.
- 9) Moraw, a. a. O., S. 119.
- 10) Osterroth/Schuster, *Chronik der deutschen Sozialdemokratie* [以下 *Chronik* と略], Bd. 2 (Berlin/Bonn, 1975), S. 426.
- 11) Kaden, a. a. O., S. 95.
- 12) Kurt Schumacher, “Wir verzweifeln nicht,” Rede am 6. Mai 1945 in Hannover, in: K. Schumacher/E. Ollenhauer/W. Brandt, *Der Auftrag des demokratischen Sozialismus* (Bonn-Bad Godesberg, 1972), S. 3-38.
- 13) Edinger, *op. cit.*, p. 102.
- 14) Schumacher, “Wir verzweifeln nicht,” S. 29 f.
- 15) Ute Schmidt/Tilman Fichter, *Der erzwungene Kapitalismus* (Berlin, 1971), S. 14 f. Lutz Niethammer/Ulrich Borsdorf/Peter Brandt (Hrsg.), *Arbeiterinitiative 1945* (Wuppertal, 1976), S. 305-329. Ernst-Ulrich Huster, *Die Politik der SPD 1945-1950* (Frankfurt, 1978), S. 183.
- 16) Holger Christier, *Sozialdemokratie und Kommunismus: Die Politik der SPD und der KPD in Hamburg 1945-1949* (Hamburg, 1975), S. 79-105. Kaden, a. a. O., S. 51 ff.
- 17) Rolf Badstübner, *Restauration in Westdeutschland 1945-1949* (Berlin(O), 1965), S. 116-120. Institut für M-L, *Die Vereinigung der KPD und SPD zur SED*, S. 166 ff.
- 18) “Kurt Schumachers Antrag auf Lizenzierung der SPD in Hannover,” in: Flechtheim, *Dokumente*, Bd. 1 (Berlin, 1962), S. 59 f.
- 19) Kaden, a. a. O., S. 69-86.
- 20) “Vorgeschichte und Verlauf der sozialdemokratischen Parteikonferenz in Wennigsen vom 5. bis 7. Oktober 1945,” in: Flechtheim, *Dokumente*, Bd. 1, S. 62-69.
- 21) Schumacher, “Programmatische Erklärungen vom 5. Oktober 1945,” in: Flechtheim, *Dokumente*, Bd. 3, S. 7.
- 22) Ebenda, S. 7.
- 23) Ebenda, S. 8.

- 24) Moraw, a. a. O., S. 120-128. なおヴェニヒセン合意では「中央委員会」が die Führung der sozialdemokratischen Partei in der östlichen Besatzungszone と表現されているのに対し、シューマッハーには der politische Beauftragte (Führung ではない) というドイツ語が使われていたことに注意。Kaden, a. a. O., S. 149.
- 25) Ebenda, S. 153.
- 26) Moraw, a. a. O., S. 119 f.
- 27) Kaden, a. a. O., S. 156 ff, 194 ff.
- 28) KPD の「転換」の正確な期日は確定しがたいが、終戦直後 KPD がベルリン SPD の要求に対して統一政党樹立の前提とした「イデオロギー浄化」(ideologische Klärung) を後退させ、「反ヒトラー闘争の共通の経験」を前面に出した 9 月 19 日のヴィルヘルム・ピークの演説に「転換」を求める見解がある。Werner Müller, *Die KPD und die "Einheit der Arbeiterklasse"* (Frankfurt/New York, 1979), S. 150 f.
本稿に引用したシューマッハーのヴェニヒセン演説の一節も、10 月初頭までに即時統一政党結成キャンペーンが KPD により開始されていたことを前提として理解できる。
- 29) アメリカの OSS (Office of Strategic Services) と関係してドイツ各地での労働組合再建に関与しつつ情報を収集していたハンス・ジャン (Hans Jahn) は、1945 年 10 月 4 日パリのアメリカ外交当局者との会合で、「もし明日ソ連地区で選挙が行われれば、SPD は 75% の票を獲得するであろう。このことを知っているので、KPD は SPD に合同の圧力をかけている」と報告していた。 *Foreign Relations of the United States* [以下 *FRUS* と略]、1945, Vol. 3, pp. 1061 f.
KPD の「転換」の理由として対外的要因、ソ連の圧力を強調する説には、ポツダム合意による共通ドイツ占領政策が定立できない上に、東欧問題やソ連軍の北部イラン駐留問題などに関するアメリカの対ソ圧力強化がソ連を刺激し、ソ連をして自己の占領地区の支配基盤強化につながる KPD・SPD 合同を強引に推進せしめたとする見解、11 月のオーストリアとハンガリーの総選挙における共産党の敗北にソ連が衝撃を受けた反応とする見解がある [たとえば、Andreas Hillgruber, *Deutsche Geschichte 1945—1975: Die "deutsche Frage" in der Weltpolitik* (Frankfurt/Berlin/Wien, 1974), S. 27 ff.]。
- 30) Müller, a. a. O., S. 152.
- 31) Moraw, a. a. O., S. 137.
- 32) "Entschließung der gemeinsamen Konferenz des Zentralkomitees der SPD und des Zentralkomitees der KPD über die Zusammenarbeit beider Parteien, 20/21. Dezember 1945," in: Gert Gruner/Manfred Wilke (Hrsg.), *Sozialdemokraten im Kampf um die Freiheit* (München, 1981), S. 193-203.
「60人会議」の議題は、(1)労働者階級の統一、(2)アメリカ占領地区での地方選挙、(3)自由労働組合結成を労働者政党はどう助けうるか、以上三議題であった。決議は、7 月以来の SPD・KPD の統一行動を高く評価し、「統一行動から労働運動の政治的・組織的統一への発展は、現在及び未来の我々の成功を確実なものとするであろう」(S. 203) と結んでいた。
- 33) "Stenographische Niederschrift der Sechziger-Konferenz am 20/21 Dezember in Berlin," in: Gruner/Wilke, a. a. O., S. 63-82.
- 34) Ebenda, S. 68-71.
- 35) Ebenda, S. 72.
- 36) Ebenda, S. 77.
- 37) Ebenda, S. 79.
- 38) SPD 代議員のなかで、無条件で即時統一に賛成の発言をした人物として、ドレスデンのオット・ブーフヴィッツ Otto Buchwitz があげられる。彼の演説は、"Stenographische Niederschrift der Sechziger-Konferenz," S. 131 ff.
- 39) Ebenda, S. 76.
- 40) 1954 年に編集されたグローテヴォールの演説著作集には、「Auf dem Wege zur Einheit」と題する、1945 年 12 月 23 日付の文章が冒頭に掲載されている。これを読む限り、彼は即時統一政党結成に積極的であるかの如くである。統一社会主義政党問題について、「60人会議」議事録による演説と食い違う主張が目立つ。著作集の文章は日付だけが記されて、出典が示されていないことをつけ加えておく。Otto Grotewohl, "Auf dem Wege zur Einheit," in: *Im Kampf um die einige Deutsche Demokratische Republik: Reden und Aufsätze*, Bd. 1 (Berlin, 1954), S. 7-11.
- 41) "Zusammenfassung über Inhalt und Sinn der Entschließung vom 21. 12. 1945," in: Gruner/Wilke, a. a. O., S. 191.
- 42) Osterroth/Schuster, *Chronik*, Bd. 3 (Berlin/Bonn, 1978) S. 32.
- 43) Kaden, a. a. O., S. 220-232.
- 44) Kurt Schumacher, "Demokratie und Sozialismus zwischen Osten und Westen, Januar 1946," in: *Ursachen und Folgen: Vom deutschen Zusammenbruch 1918 und 1945 bis zur staatlichen Neuordnung Deutschlands in der Gegenwart: Eine Urkunden- und Dokumentensammlung zur Zeitgeschichte*, Bd. 24 (Berlin, o. J.), S. 323.
- 45) Ebenda, S. 325.
- 46) Theo Pirker, *Die SPD nach Hitler* (München, 1965), S. 39 f. Müller, a. a. O., S. 230 ff. Kaden, a. a. O., S. 220 ff.
- 47) Sergej Ivanovic Tjulpanov, "Gedanken über den

- Vereinigungsparteitag der SED 1946," *Zeitschrift für Geschichtswissenschaft*, 18-5 (1970), S. 620 ff.
- 48) Elmar Krautkrämer, *Deutsche Geschichte nach dem zweiten Weltkrieg* (Hildesheim, 1962), S. 95 f.
- 49) "The United States Political Adviser for Germany (Murphy) to the Secretary of State, Berlin, February 15, 1946," *FRUS*, 1946, Vol. 5, pp. 702 f. [アメリカ軍政府政治顧問マーフィーがバーンズ國務長官にあてた報告書 (Murphy to Byrnes と略) は, SPD 再建過程, 特にベルリンやソ連地区での展開, それに対するアメリカの対応等を知る上で有用である.]
- 50) Osterroth/Schuster, *Chronik*, Bd. 3, S. 33.
- 51) Kaden, a. a. O., S. 220 ff. Müller, a. a. O., S. 234.
- 52) Ludwig Bergsträsser, *Geschichte der politischen Parteien in Deutschland* (München, 1960), S. 307.
- 53) Manfred Overesch, "Hermann Brill und die Neuanfänge Deutscher Politik in Thüringen 1945," *Vierteljahreshefte für Zeitgeschichte*, 27-4 (1979), S. 524-569.
 ブリルは究極的目標としての統一労働者政党樹立には賛成であったが, それは KPD が主張する期日を定めての SPD・KPD 合併ではなく, 新しいドイツ労働者政党の建設でなければならないと主張した.
- 54) "Schreiben des Mitglieds des Zentrallausschusses der Sozialdemokratischen Partei Deutschlands, Gustav Dahrendorf, an die Vorstandsmitglieder Gniffke und Grotewohl," Berlin, den 17. Februar 1946, in: *Ursachen und Folgen*, Bd. 24, S. 321 f.
- 55) しかし, ソ連地区での一年間の再建過程を総括して, 「KPD の圧力による一方的な強制合同」と社会主義統一党 (SED) の成立を規定することは適当ではない. 「労働者階級の統一」という理念に SPD 再建の最優先価値を置くという「中央委員会」の方針はグローテヴォールを中心に原則的には維持されていたこと, シューマッハーの「中央委員会」に対する協力拒否・非寛容の対応によってグローテヴォールが KPD 側に歩み寄らざるを得ないという側面があったことは留意されるべきである. マーフィーも社共即時合同に反対して強制収容所に送られた者がいると報告しながらも, 「他方では, 特に相変らず急進的なザクセン州やチューリンゲン州では多数の SPD 黨員や指導者が心から単一の労働者政党の創設を支持したし, そのような展開をヒトラーの時代から夢見ていたようである」と書いていた. さらに続けて, イギリス軍情報機関の説得に応じてダーレンドルフは亡命するが, 「西側へ動かそうとするイギリスの努力にもかかわらず, ベルリンの統一政党に残るとい意志をグローテヴォールは示している」と報告した. "Murphy to Byrnes, Berlin, February 15, 1946," *FRUS*, 1946, Vol. 3, p. 703.
 なお, オット・ブーフヴィッツはザクセン州 SPD の指導者であった.
- 56) ベルリン SPD 投票有資格者数 3 万 2, 547, 投票総数 2 万 3, 775 (ソ連セクターでは投票禁止)
 ・即時合同に賛成か 賛成 2, 937 (12%)
 反対 19, 529 (82%)
 ・兄弟げんかを排する同盟 (Bündnis) に賛成か 賛成 14, 763 (62%)
 Osterroth/Schuster, *Chronik*, Bd. 3, S. 36.
- 57) SED 成立については, 研究史的には 1946 年から今日に至るまで, 「強制合同」(Zwangvereinigung) とネガティブに評価する見解と「労働者階級の分裂の克服」と積極的に評価する見解とが, 論者の政治的・イデオロギー的立場とも関連して対立を続けている. 歴史的には 1946 年 4 月の SED の成立は, 「自発」と「強制」・SPD の内部分裂の amalgam であると規定するのが適切であると考えられる. また, 正確な数は把握できないが, もともと西側地区に生活基盤を有しながらも, 労働者階級統一政党の発展に希望を託してソ連地区へ渡った SPD 黨員もいたことは, 留意されるべきである. シューマッハーの禁令を破って, つまり除名を覚悟のうえで 1946 年 4 月 20 日ソ連地区 SPD 大会に参加した 103 人の「西側 SPD 代表者」(Osterroth/Schuster, *Chronik*, Bd. 3, S. 37) はその一部であったと推測される.
- 58) Ernst Deuerlein, *Die Einheit Deutschlands*, Bd. 1 (Frankfurt/Berlin, 1961), S. 261.
- 59) Kaden, a. a. O., S. 381 f. ジグムント・ノイマン, 渡辺一訳『政党—比較政治史的研究—』II (みすず書房, 1961年), 502頁.
- 60) John Allen Maxwell, "Social Democracy in a Divided Germany: Kurt Schumacher and the German Question, 1945—1952," (Ph. D. dissertation, West Virginia University, 1969), pp. 77 ff. "Organisations-Statut der Sozialdemokratischen Partei Deutschlands," in: *Protokoll der Verhandlungen des Parteitag der Sozialdemokratischen Partei Deutschlands 1947 in Nürnberg* [以下 *Protokoll 1947 in Nürnberg* と略], Nachdruck (Hamburg, 1948), (Berlin/Bonn, 1976), S. 3-9.
- 61) Renata Fritsch-Bournazel, *Die Sowjetunion und die deutsche Teilung* (Opladen, 1979), S. 34.
- 62) Douglas A. Chalmers, *The Social Democratic Party of Germany* (New Haven/London, 1964), p. 15.
- 63) Ulrich Hauth, *Die Politik von KPD und SED gegenüber der westdeutschen Sozialdemokratie* (1945—1948) (Frankfurt/Bern/Las Vegas, 1978), S. 192 f.

II シューマッハーの SPD 再建構想

シューマッハー1人の力で SPD が再建されたのではないが¹⁾、KPD との合同を排した西側地区の SPD 再建過程で彼の果たした役割は絶大であり、以後「ベーベルの時代にもなかった権威を以て1952年の死の時まで彼は SPD の揺ぎない指導者であった」²⁾。シューマッハーの SPD 再建構想について、I では統一社会主義政党に対する対応に専ら焦点を合わせて論じたが、他に彼はいかなる構想を抱き SPD を指導せんとしたのか。

1 社会主義者となる動機の多元性の承認

1945年10月27日、シューマッハーはキール大学で行った演説で次のように述べた。「SPD には多くの人が様々な異なった精神的・慣習的・政治的動機から結集するであろう。……社会民主党員となった動機がマルクス主義的経済分析方法を通じてであるか、哲学的倫理的な理由からか、それとも山上の垂訓の精神であるかはどうでもよい問題である。各人は自らの精神的人格の主張・動機を党において公然と主張する等しい権利を有する」³⁾（圈点引用者）これは「社会主義者となる動機の多元性の承認」として知られ、彼は同趣旨の発言を特に党再建期においてくり返し強調した⁴⁾。第三帝国以前の時代においても、新カント主義哲学は19世紀末以来 SPD を震撼させた「修正主義」と結合した。またヴァイマル時代には、「キリスト教と社会主義とはさらに進歩を遂げて一致し、一つの新たな世界秩序・社会体制とならなければならない」⁵⁾と主張し、SPD に入党したパウル・ティリヒの如きプロテスタント神学者も現われてはいた。しかし、SPD はマルクス主義というイデオロギー・世界観と労働者階級という特定階級との強固な結合を基礎に結党され、党の組織・構成・現実の実践活動は変化しながらも、党を支える権威としてのマルクス主義はヴァイマル時代に至るまで不動の地位を占めていた。他の潮流は「異端」であった。ところが SPD 再建にあたってシューマッハーは、マルクス主義的動機・哲学的倫理的動機・キリスト教社会主義的動機のそれぞれに対して「等しい権利」を保証したのである。換言すれば、1945年党再建の出発点において、SPD の「ドグマとしてのマルクス主義」は否定された。こ

れは、シューマッハーによる SPD と社会主義イデオロギー・マルクス主義との関係に対する重要な修正と言えよう。

しかし、「多元性の承認」を以て SPD がマルクス主義を放棄したと論じることは誤解を招く恐れがある。シューマッハーが強調したのは、マルクス主義に伝統的権威を付与し絶対的真理性を主張してドグマ化することを否定し、現状把握・歴史分析方法としてのマルクス主義を再評価することであった⁶⁾。彼はソ連におけるマルクス主義の「展開と変質過程」は SPD がマルクスから獲得した成果とは何の関係もないと論じ、「マルクス主義はその最重要の二規範、すなわち経済的歴史把握 *ökonomische Geschichtsauffassung* と階級闘争 *Klassenkampf* において時代遅れとはなっていない」⁷⁾と述べていた。が、注意すべきは、彼は「経済的歴史把握」概念を「史的唯物論」とは一線を画し⁸⁾、「階級闘争」概念も資本家対労働者という階級対階級の対立図式において捉えるべきではないとした⁹⁾。彼は「すべての人間が平等の権利・義務を持って、階級闘争は終結する」¹⁰⁾と論じ、「プロレタリア独裁」や「階級なき社会」は SPD とは縁のない理念とされたのである¹¹⁾。ゆえに、労働者階級こそ「階級闘争」の推進者であり「階級闘争」こそ民主主義であるとする人人が、シューマッハーがその用語を多用しているにもかかわらず、「シューマッハーは階級闘争のマルクス主義的教義を拒否した」¹²⁾と論じているのは何ら奇異ではない。

では、なぜシューマッハーは党再建にあたり「多元性の承認」を強調したのか。第一に、それは、SPD の「決定的成功は明らかにこの土台（労働者階級—引用者）から出発して、中間層大衆を獲得して初めて存在する」¹³⁾という、シューマッハーの中間層重視の再建方針の必然的帰結であった¹⁴⁾。第二に、「理論的綱領は過渡期においては意味がない。我々の欲するのは、日々の生活において助けとなる具体的プログラムである」¹⁵⁾という純粋にプラグマティックな見地から、社会主義イデオロギーの「正統」と「異端」をめぐる闘争から再建 SPD を突き離し、はなはだしいイデオロギー的対立によってヴァイマル時代のように SPD が分裂・弱体化しないように指導する必要があると彼が確信したからではないだろうか。以上のような SPD の「非イデオロギー政

党化」促進が、1945年の出発点からシューマッハーの再建構想の中心にあったことは銘記されて然るべきである。

2 SPD と民族・国家 ——民主主義と「ナショナリズム」の整合化——

SPD は結党以来「インターナショナルナリズム」と「ナショナリズム」の二極の間で動揺を続け、1914年8月に帝国主義的国民国家に対しイエスと答えた後、ヴァイマル時代は再び国際主義を国民国家的理念よりも優位に置いた¹⁶⁾。その結果ヴァイマル時代を通じてSPDは、ヴェルサイユ体制に反発する国民感情 Nationalgefühl や国民観念 Nationalgedanke を民主主義擁護勢力に結合することができなかつた。ドイツ人の国民感情は、「外国からの押しつけである民主主義」をもたらして履行政策を推進するSPDを、「祖国の裏切り者」と非難攻撃する反民主主義右翼に吸収され、偏狭で侵略的なショーヴィニズムに転化させられてしまった。ヴァイマル・デモクラシー崩壊とナチズム体制成立を体験したシューマッハーは、national と nationalistisch とを峻別して「健全なナショナルナリズム」＝国民感情をSPDに結合する必要を確信し、それを歴史的課題と強く意識して活動すべきとした¹⁷⁾。

第二次大戦後のドイツに西欧民主主義を定着せしむることを自己の使命と任じていたシューマッハーにとって、ヴァイマル時代に体験したドイツに根強い反民主主義的・反議会主義的伝統、政党支配という政治形態に浴びせられた深い軽蔑、それらと結合した排外的ドイツ・ナショナルナリズムは、第三帝国と同時に崩壊したとは信じられなかつた。それが基盤の脆弱なドイツ民主主義を1945年後再び封殺するのではないかという恐れを、彼は強く抱いていた。たとえば、「ドイツ民主主義にも、精神的政治的に伝統がないとは言えぬ。……しかし他方で民主主義は、1918年後の場合のようにドイツ史やドイツの生活形態には適さない外国からの輸入植物であるという煽動を受け排斥された。今日、この危険は当時よりも比較にならないほど大きい」¹⁸⁾などと述べ、占領期の社会的混乱や経済的困窮化による不満と結びついた反民主主義的ナショナルナリズム台頭の危険性に警告を発したのである。

ゆえに、シューマッハーには、ヴァイマル時代

SPDの履行政策を再び行うこと、すなわち連合国の占領政策を従順に受け入れることがドイツにおける民主主義の安定と定着のために効果的とは考えられなかつた。年ごとに激しさを増した彼の占領国批判や断片的言動を継ぎ合わせれば、彼にヴァイマル時代の右翼ナショナルナリストと二重写しのイメージを与えることは、政治的敵手にとって困難な仕事ではなかつた¹⁹⁾。しかし、そのようなシューマッハーの行為は、反民主主義的ナショナルナリズムを封ずるための、民主主義に対する信仰告白の強さのゆえの行為だったのである²⁰⁾。その行為を導いた構想を、西欧民主主義と社会主義の唱道者であるSPDとドイツ国民感情を固く握手させることを通じ、民主主義をドイツに定着させんとした「民主主義防衛ナショナルナリズム」と表現することは許されよう。シューマッハーは、国民的団結を階級的統一に優先させ、労働者階級を国家・民族へ統合する試みを意識的かつ継続的に実行せんとした²¹⁾。彼の指導の下で、SPDは「祖国なき輩」という「伝統的非難」とは無縁な政党となったのである²²⁾。

「ドイツでは民主主義は社会主義的であるか、さもなくば死滅するかのどちらかであろう」²³⁾とシューマッハーは、「社会主義か無か」と二者択一を迫る革命的社会主義者の如き警告をくり返した。が、彼の言う「社会主義」とは、特定部門（鉱業、重工業、エネルギー、交通、金融・保険）の独占的大資本・大土地所有の社会化という経済的分野に厳格に限定されていた²⁴⁾。その社会化要求も、社会化＝社会主義という自己目的化した教条的観念からでなく、19世紀末からのドイツ帝国主義の歴史分析から彼の確信した「西欧民主主義と資本主義との共存が不可能というドイツの歴史的特殊性」の認識から生じたのである²⁵⁾。だからこそドイツにおける西欧民主主義定着のため、ヴァイマルをくり返さないためにシューマッハーは、政治的問題としての社会化要求に固執せざるを得なかつた。彼にとって、西欧議会制民主主義・認識と人格の自由・社会主義は三位一体を為していた。1946年5月再建第一回党大会を閉じるにあたって採用されたシュプレヒコールが、6回にわたってくり返された「自由万歳」であったことも記憶に留めておくべきであろう²⁶⁾。

以上この節で述べてきたことから、第二次大戦直

後1945～1946年のSPD再建期において、すでに少なくとも理念的には、1959年のバート・ゴデスベルク綱領の精神的外枠が、再建SPDの進むべき方向としてシューマッハーによって与えられていたと言つて過言ではないであらう²⁷⁾。

- 1) シューマッハーの影響力が及ばずに社共統一運動（1946年11月ごろまで）の挫折した例として、フランス地区バーデンの運動がある。Müller, a. a. O., S. 243.
- 2) Pirker, a. a. O., S. 54.
- 3) Kurt Schumacher, "Neubau und nicht Wiederaufbau," Rede am 27. Oktober 1945 in Kiel, in: S. Miller, *Die SPD vor und nach Godesberg* (Bonn-Bad Godesberg, 1978), S. 93
- 4) Schumacher, "Programmatische Erklärungen," Rede am 5. Oktober 1945 in Wennigsen, in: Flechtheim, *Dokumente*, Bd. 3, S. 8. Schumacher, "Grundsätze sozialistischer Politik," Rede am 9. Mai 1946 in Hannover (Hamburg, 1946), S. 10.
- 5) パオル・ティリヒ, 古屋安雄・栗林輝夫訳『キリスト教と社会主義』(白水社, 1978年), 38-39頁.
- 6) Schumacher, "Wir verzweifeln nicht," S. 3. Schumacher, "Programmatische Erklärungen," S. 5.
- 7) Schumacher, "Grundsätze sozialistischer Politik," S. 10.
- 8) *Protokoll 1946 in Hannover*, Nachdruck (Hamburg, 1947) (Berlin/Bonn, 1976), S. 196.
- 9) Schumacher, "Programmatische Erklärungen," S. 4.
- 10) Schumacher, "Grundsätze sozialistischer Politik," S. 10.
- 11) Ebenda, S. 14.
- 12) Ulla Plener, "Kurt Schumachers Konzeption der demokratischen Republik — die Grundlage seiner antikommunistischen Politik (1945/1946)," *Beiträge zur Geschichte der deutschen Arbeiterbewegung*, 8-5 (1966), S. 810.
- 13) Schumacher, "Programmatische Erklärungen," S. 4.
- 14) Schumacher, "Die Sozialdemokratie im neuen Deutschland," Rede am 27. Januar 1946 in Hamburg (Hamburg, 1946), S. 17 f.
- 15) SPD-Vorstand, *Kurt Schumacher* (Bonn, 1952), S. 5.
- 16) Hermann Heidegger, *Die deutsche Sozialdemokratie und der nationale Staat 1870—1920* (Göttingen/Berlin/Frankfurt, 1956), S. 386 ff.
- 17) V. Stanley Vardys, "Germany's Postwar Social-

ism: Nationalism and Kurt Schumacher (1945—1952)," *The Review of Politics*, 27-2 (1965), S. 242 f. Heinrich G. Ritzel, *Kurt Schumacher* (Reinbeck bei Hamburg, 1972), S. 116 ff.

- 18) Schumacher, "Neubau und nicht Wiederaufbau," S. 94.
- 19) 1949年2月『ニューヨーク・タイムズ』にはアメリカ軍政府高官2人（推測するにクレイ軍政長官とマーフィー顧問）の話として、「もしナショナリズムが発生し増大するとすれば、……来るべき西ドイツ国家で単独完全権力を掌握する手段として、SPDがナショナリズムを信奉する場合である。……シューマッハー博士が指導者となったときから、SPDはナショナリストであった」という記事が掲載された。*New York Times*, Feb. 16, 1949, p. 14. クレイ長官は、何よりも分裂したドイツの克服を求める占領国批判がドイツ・ナショナリズム復活と結合することを恐れていた。Lucius D. Clay, *Decision in Germany* (New York, 1950), pp. 92, 439. ゆえに、シューマッハーは最も警戒すべき「ナショナリスト」と位置付けられた。
- 20) たとえば1947年1月のミュンヘンでの演説では、「我々は今、社会的・人道的に悲劇的結末をもたらす恐るべき寒さのなかにいる。……連合国に告げねばならぬことは、完全な勝利は完全な責任を意味するということである」と占領国を批判した。しかしその底意には、拙劣な占領政策による政治の困窮が「民主主義に対する不信」を生むかもしれないという憂慮があったのである。Schumacher, "Volk in Not: Mahnruf der SPD an die Sieger," Rede am 12. Januar 1947 in München (München, 1947), S. 3, 5.
- 21) しかし、シューマッハーが「国際主義を否定した」という議論は適切ではない。1945年5月6日、彼は次のように述べた。「我々社会民主主義者は、ドイツ労働者階級の必要に目を向け、この立場から世界の全労働者政党との国際的協力を行わなければならない」。Schumacher, "Wir verzweifeln nicht," S. 30.
- 22) Vardys, *op. cit.*, pp. 234 ff.
- 23) Schumacher, "Die Sozialdemokratie im neuen Deutschland," S. 9.
- 24) "Leitsätze zum Wirtschaftsprogramm-Entwurf Dr. Schumachers von 1945," in: Flechtheim, *Dokumente*, Bd. 3, S. 9 ff.
- 25) シューマッハーは、1945年5月6日の演説で「結集した反動勢力は、資本主義と民主主義とが共存的生活様式を見つけたアングロ・サクソン諸国や西ヨーロッパを見ても、何も心にとめるものはなかった」と、ドイツの支配層を批判した。Schumacher, "Wir verzweifeln nicht," S. 6.
また、10月27日の演説では、「大資産家の生産手段の非私有化とその公共所有への移管は、経済的問題で

あるだけでなく決定的に政治的問題である。……ドイツでは責任なき私人の手に大資産が集中されるということが可能である限り、民主主義は確実なものとはならない。Schumacher, "Neubau und nicht Wiederaufbau," S. 88 f.

26) *Protokoll 1946 in Hannover*, S. 205.

27) 仲井氏は「ゴードスベルク綱領の精神」として、①労働者階級の「国家」への統合、②思想と思考の多元性、③労働者階級と国防軍・カトリックとの和解、④社会化＝社会主義という〈信仰〉からの解放、以上4点を指摘しておられる。仲井、前掲書、41-51頁。

III カトリック左派と SPD 1945—1947

シューマッハーの SPD 再建構想の中核には中間層獲得¹⁾を SPD 成功の鍵とする方針があり、1959年のバート・ゴードスベルク綱領へ直接つながる理念が含まれていた(II参照)。シューマッハーは彼の意図する再建 SPD の性格を、「古い名前」と同時に「新しい顔」を持った政党たるべしと規定したのである²⁾。しかし SPD は早くも1946年5月に、1933年以前の組織・人材を基盤とした、過去の経験を共有する労働者主体の同志的結合の強い政党として再建されてしまっていた(I参照)。この構想と現実との間に緊張関係の内在することは不可避であった。

1945~1947年は一見 SPD の上昇期であったかに見える。SPD は、戦後ドイツの諸政党のなかでも早期に中央指導部を定立した。党员数も1946年12月には71万1,448人を結集し、1947年12月には87万5,479人に達した。党組織の最小活動単位 Ortsverein の数も1947年末までに9,191にのぼった³⁾。また1946年のアメリカ地区選挙では不振であった SPD も、1947年4月イギリス地区州議会選挙では得票率36.8%、172議席を得て、32.2%、143議席の CDU を押えて第一党に踊り出た⁴⁾。しかし同時に、1946~1947年にかけて青年党员・婦人党员の不足、カトリック教会との対立や中間層の支持獲得の困難など、SPD の党勢伸長を妨げる諸要因も明らかになっていたのである⁵⁾。

以上の如き矛盾と困難を抱えたシューマッハー指導下の SPD の展開を考える上で、ここでは SPD とカトリック左派との関係を考えたい。第二次大戦後のドイツではキリスト教社会主義者を自認する政治家は無視できぬ勢力であり、その中核を為してい

たのが以下で論じるカール・シュピーカー Carl Spiecker やヤコブ・カイザー Jakob Kaiser を旗頭とするカトリック左派に属する人々であったからである。

第二次大戦後、プロテスタント・カトリック両派を糾合して新結成された CDU・CSU とは別に、ヴァイマル時代以前からのカトリック政党、中央党の名を冠した政党が結成された。中央党の綱領は経済政策の分野においては、独占資本の解体・基幹産業の社会化の提唱など、SPD の経済政策と共通した要求が少なくなかった⁶⁾。中央党の左派に属する人人のなかには、1945年7月のイギリス労働党の政権獲得に刺激され、ドイツにもイギリス労働党を範とした労働者政党を結成しようという気運が強まった。この勢力を代表したのがシュピーカーであった⁷⁾。

1945年12月、シュピーカーは、反動勢力の弱くはない CDU と合同するよりは SPD とドイツ労働党を結党したいとの旨を、ハンブルク在住の社会民主党員を通じてシューマッハーに伝えた。この「ドイツ労働党」構想には SPD からも呼応する勢力はあった。なかでも著名な人物としては、戦前プロイセン州内相を勤めたカール・ゼーフリングがあげられる。しかし、シューマッハーはこの構想と提案を無視し、検討の対象にもしなかった⁸⁾。

次に CDU 左派との関係を検討しよう。1946年10月、四占領国共同管理下にあったベルリンで行われた最初にして最後の自由選挙で、CDU の掲げた選挙ポスターには次のような一節があった。「我々は時代の転換点に立っている！ プルジョフ・資本主義的時代は過去のものとなった！ 未来は社会主義のものである！」⁹⁾ このポスターを掲げたベルリン CDU の指導者が、1947年12月ソ連軍政府によって罷免されるまでソ連地区 CDU 委員長長の地位にあったヤコブ・カイザーであった。彼は CDU カトリック左派の代表的政治家であり、彼の外交構想は「東と西とのかけ橋としてのドイツ」、再統一された中立ドイツの実現を理想としていた¹⁰⁾。

彼の「かけ橋」構想は、1946年9月6日のバーンズ米國務長官のシュトゥットガルト演説¹¹⁾に触発され、「政党による国民代表」(Nationale Repräsentation durch die Parteien) 構想という具体的政策となった。この構想は、ドイツ人側の政治的意志の担い手・ドイツ人を代表するのは州首相ではなく政

党指導者であるという基本的立場に立脚した。そのためカイザーは、政党代表者による協議機関の設置を要求したのである。この政策はカイザーが中心となり、バイエルン州 CSU のヨゼフ・ミュラー Josef Müller も協力し、東西地区 CDU/CSU の総意として提唱された。1947年3月16日、カイザーは「国民代表」会議への招待状を SPD のシューマッハー、SED のグローテヴォールとピーク、LDP（ソ連地区自民党）のヴィルヘルム・キュルツ Wilhelm Külz の4人に送付した。この構想では SED はソ連地区 SPD・KPD の連合体と見なされ、四占領地区から各政党が2人ずつ代表を送るとされた。カイザー提案は西側地区政治家にも党派を越えて共鳴者を見出し、シューマッハーを除く3人は承諾の返事を与えた。カイザーの「国民代表」構想がドイツの一体性保持のための示威運動となり、占領国に対してドイツ側の総意として対抗できるかは、ひとえにシューマッハーの対応にかかったのである¹²⁾。

しかし、この「国民代表」構想は、シューマッハーによって徹底的に拒絶された。彼は、SED が解散してソ連地区で SPD の復活が許可されない限り SED とは一切交渉しないという、1946年5月以来の原則を堅持した。終始一貫した彼のこの対応は、ドイツ再統一に対する彼の願望にもかかわらず、ドイツの東西分断をドイツ人内部から深め、結果的には再統一を困難とする方向へ多大の寄与をしてしまうのである。1947年5月、カイザーは西側地区での「国民代表」構想キャンペーンを手伝うため、西側地区へ旅行を試みた。その主要目標が、シューマッハーの説得にあったことは疑いない。カイザーはハノーファーを最初の訪問地を選び、二度シューマッハーと会談した。しかし、シューマッハーの態度を変更せしめることは不可能であり、「国民代表」構想は破綻したとカイザーは悟らなければならなかった¹³⁾。シューマッハーとの協力を切望していたカイザーも、「SPD の態度は占領地区分断の克服には貢献しない¹⁴⁾」と非難せざるを得なかったのである。ドイツの一体性を保持せんとした一運動は、1947年中盤に占領軍の圧力がかかる以前に、ドイツ側内部の対立構造が原因となって崩壊していたのである。

カイザーは1947年後半に入っても、シューマッハーとの協力、SPD との大連立に望みをつないでいた¹⁵⁾。基幹産業・大土地所有の社会化要求、州首相

を排して政党指導者をドイツ側の政治勢力の代表と主張したこと、ドイツ再統一に対する願望など、確かにシューマッハーとカイザーの主要政策目標は共通していた。しかしシューマッハーは、カイザーがソ連地区に活動の根拠を持ち、ソ連軍政府や SED と妥協を重ねるといふ実績を積んでいたことも手伝って、カイザーからの誘いを受けつけなかった。1947年後半、カイザーはソ連軍政府の占領政策と対立を深めた¹⁶⁾。1947年12月21日、彼はソ連軍政府の命令によりソ連地区 CDU 委員長の地位を解任され、CDU 内での発言力も低下せざるを得なかった¹⁷⁾。

シューマッハーがカトリック左派と連合できなかった基本的要因は、彼の頑強な反教権主義・反政治的カトリシズム・「政治介入」を理由としてのカトリック教会に対する反発にあった¹⁸⁾。また多様な政治勢力の連合体であった CDU を一緒にして、KPD + SED と並ぶ SPD の敵であるとシューマッハーは CDU を攻撃した¹⁹⁾。かくの如き対応は、一時は真剣に SPD に接近せんとしたカトリック左派をキリスト教民主主義勢力のなかで孤立せしめ、シューマッハーの敵対者アデナウアーの側へ追いやる結果となった。シュピーカーは、1949年1月にはアデナウアーと共に中央党と CDU の合併を提唱し、自らは率先して CDU に移った²⁰⁾。またカイザーも、1949年9月第一次アデナウアー内閣に全ドイツ問題相として入閣し、アデナウアーに屈したのである。

シューマッハーの CDU 左派に対する冷淡な態度は、1947年6月以後フランクフルトに設置された英米地区経済評議会において、SPD に対する CDU/CSU・FDP・DP（ドイツ党）という反 SPD 「ブルジョワ政党ブロック」の成立と確定においても大きな役割を果たした²¹⁾。

シューマッハーは「社会主義者となる動機の多元性の承認」で、キリスト教社会主義者に対しても門戸を開放した。しかし、カトリック左派に対する一連の対応によって、彼の目の向けられていたのは、プロテスタント系キリスト教社会主義者に限られていたことが明らかになった。カトリック教会との対立は、政治勢力としてのカトリック左派への敵対的対応とつながったのである。シューマッハー指導下の SPD がカトリック左派との連立を1945～1947年にかけて、カトリック左派側からの働きかけにもかかわらず拒絶し続けたことは、1947年以後 SPD の

支持基盤拡大を阻害する一大要因となった。SPD が活動を限定された、エルベ河以西の西側三国占領地区は、バイエルン・ラインラントをはじめカトリックの優勢な地区が多かった。カトリックは第二帝政以来の少数者の地位から脱却していた。シューマッハー自身が強調したように、SPD が新たに中間層獲得を至上命題とし、1933年以前の支持基盤を越えた政党として西側地区で発展するためには、カトリック住民を SPD 支持層に加えることは必要不可欠であった。しかしシューマッハーの実践は、それに応えるものではなかった。カトリック左派の連立要請に対して彼の取った行動は、SPD の党勢停滞・国内的孤立化の最大要因の一つであったと言って過言ではない。

- 1) J. コッカは、中間層のなかでも Angestellte と Beamte 獲得が中心に置かれていたと論じている。Jürgen Kocka, "1945: Neubeginn oder Restauration?" in: Carola Stern/Heinrich A. Winkler (Hrsg.), *Wendepunkte deutscher Geschichte 1848—1945* (Frankfurt, 1979), S. 161. しかし、シューマッハー自身はそれらに限らず、商人・手工業者を含めた中間層一般を含めて支持基盤を拡大しようとしており、特に農民の支持獲得を SPD の課題として強調していた。Schumacher, *Die Sozialdemokratie im neuen Deutschland*, S. 17 f. Schumacher, "Neubau und nicht Wiederaufbau," S. 89 f.
- 2) *Protokoll 1947 in Nürnberg*, S. 221.
- 3) *Jahrbuch der SPD 1946*, Nachdruck (Göttingen/Hannover, 1947) (Berlin/Bonn, 1976), S. 18 ff. *Jahrbuch der SPD 1947*, Nachdruck (Göttingen/Hannover, 1948) (Berlin/Bonn, 1976), S. 38 ff.
- 4) *Ebenda*, S. 163.
- 5) *Protokoll 1946 in Hannover*, S. 94—124. *Protokoll 1947 in Nürnberg*, S. 91—102.
- 6) Bergsträsser, a. a. O., S. 321 ff.
- 7) A. R. L. Gurland, *Die CDU/CSU: Ursprünge und Entwicklung bis 1953* (Frankfurt, 1980), S. 27.
- 8) Max Gustav Lange/Gerhard Schulz/Klaus Schütz (Hrsg.), *Parteien in der Bundesrepublik* (Stuttgart/Düsseldorfer, 1955), S. 29. Maxwell, *op. cit.*, p. 91 ff.
- 9) Bernt Engelmann, *Wie wir wurden, was wir sind: Von der bedingungslosen Kapitulation bis zur unbedingten Wiederbewaffnung* (München, 1980), S. 2.
- 10) Werner Conze, *Jakob Kaiser: Politiker zwischen Ost und West 1945—1949* (Stuttgart/Berlin/Köln/

Mainz, 1969), S. 68.

- 11) "Restatement of United States Policy on Germany by the Secretary of State (Byrnes), Stuttgart, Germany, September 6, 1946," in: *Documents on American Foreign Relations*, Vol. 8 (Princeton, 1947), pp. 210—218.
- 12) Schwarz, *Vom Reich zur Bundesrepublik*, S. 310—337.
- 13) Gerhart Binder, *Deutschland seit 1945* (Stuttgart, 1969), S. 151 ff.
- 14) *Keesing's Archiv der Gegenwart*, 30. Mai 1947.
- 15) ベルリンにいたアメリカ軍政府政治顧問マーフィーは、8月にカイザーと接触したときの話として、カイザーがアデナウアーよりもシューマッハーと協力したいと述べた旨を報告している。FRUS, Vol. 2, 1947, 1947, p. 886.
- 16) 直接には、「人民議会」構想に対する反対であった。"Absage Jakob Kaisers (zum Deutschen Volkstagskongress) vom 26. November 1947," in: *Ursachen und Folgen*, Bd. 25, S. 392 f.
- 17) カイザー罷免の持つ象徴的意義は、極めて重大である。ソ連との協力・妥協の必要性と可能性を主張していた「社会主義者」のソ連軍政府による追放によって、西側指向でもなければ東側指向でもない「ブロック自由」(Blockfreiheit)を追求する再統一ドイツ追求構想は、ドイツ人の前から有力な選択肢としては姿を消した。1948年1月には、中立ドイツを代表する有力な政党勢力は存在しなくなった。
- 18) Maxwell, *op. cit.*, pp. 275 ff.
- 19) *Protokoll 1947 in Nürnberg*, S. 55.
- 20) *Keesing's Archiv der Gegenwart*, 17. Januar 1949.
- 21) Gerold Ambrosius, *Die Durchsetzung der Sozialen Marktwirtschaft in Westdeutschland 1945—1949* (Stuttgart, 1977), S. 86 ff. Heino Kaack, *Geschichte und Struktur des deutschen Parteiensystems* (Opladen, 1971), S. 188 ff.

おわりに

不十分ながらも冒頭に提示した三つの具体的論点のうち、第一点と第二点には一応の答をⅠ～Ⅲにおいて与えてきたと思うので、最後に SPD のリーダーとしてのシューマッハーについて簡潔にまとめて本稿を閉じることにしたい。

ドイツ社会主義運動史上、個性とリーダーシップの強烈さにおいてシューマッハーと比肩されるのはラッサールとベーベルだけであり、彼が1952年8月の死の瞬間まで戦後 SPD の揺ぎない指導者であったことは、彼の同時代人や研究者の共通認識であ

る¹⁾。彼は第一次世界大戦で右腕を失い、1948年3月～1949年4月には左足切断を要した長期療養を余儀なくされたが、最後まで引退はしなかった。戦後SPDの党機構が、特に再建直後の占領期においては官僚的組織運営型でなく指導者強調型の指導を要請したことも手伝って、シューマッハーには党によって「カリスマ的指導者」としての地位とイメージが与えられていたのである。

しかし、1950年代のSPDの長期的低落傾向がすでに1947年後半以降シューマッハーの下で顕在化しつつあったにもかかわらず、彼が歯止めをかけられず、SPDに重い負債を残して世を去ったのも事実である。この理由は、政策レベルの問題としては基幹産業の社会化を柱とする経済政策、東と西の間で複雑な舵取りを要する外交政策²⁾が行きづまったからであったが、問題は彼のパーソナリティのレベルまで降りて考察される必要がある。

シューマッハーは1945～1946年のKPDとの合同問題において見られたように、状況が混乱し方針を確定しうる客観的諸条件が整わずとも、自己の信念・価値基準を前面に押し出し貫徹し他者を引っぱる強固な意志を有した指導者であった。しかしそのような性格は、変化する状況に対応する柔軟性を欠くと、ただ非妥協的で独善的な頑迷さに転じてしまう。それは特に、カトリック左派との協力拒否・CDUとの連立拒否などの選択に端的に現われていた。その際には、ヴァイマル時代のSPDの誤りを避けようとする警戒心、「ヴァイマルの教訓」が強迫観念として終始一貫彼の思考・行動様式を規定していたことを理解する必要がある。彼は、何よりも「ブルジョワ政党」との社会主義的原則をないがしろにした連立がヴァイマル・デモクラシーとSPDの没落を導いた理由であると確信しており、それを第二次大戦後に反復することはSPDの自殺行為であると考えたのである。彼はCDUを「ブルジョワ政

党」としか見なかった³⁾。

また、シューマッハーは感情過多で、「敵」に対しては極めて非寛容であった。その非寛容性は他党に対してだけでなく、SPD内部で彼と意見を異にする人々に対しても向けられ、ブレーメン市長のヴィルヘルム・カイゼン Wilhelm Kaisen、バイエルンのヴィルヘルム・ヘグナー Wilhelm Hoegnerなどの人材も中央指導部からは排除された。シューマッハーは、ハノーファーのSPD指導部の幹部をすべて彼に忠実な側近で固め権力を集中せんとした。しかし、シューマッハーと対立する者は中央指導部で必ずしも争わず、州に場を保ち活動した⁴⁾。強調されるシューマッハーの「権威」も以上のような事情をふまえて理解されるべきであり、それはまた連邦SPDの硬直化・弱体化と表裏一体の関係にあったのである。

- 1) その「共通認識」にもかかわらず、研究史的には、シューマッハーを「ラッサール主義者」〔G.リヒトハイム、庄司興吉訳『社会主義小史』（みすず書房、1979年）、340頁〕と評価する見解もあれば、「彼の思想は、彼が認める以上にはなほだしく優位を占めるマルクスのカテゴリーによって形成された」〔Schwarz, *Vom Reich zur Bundesrepublik*, S. 484〕として、「マルクス主義者」の側面を重視する評価もあり、混乱無しとはしない。が、彼を特定のイデオロギーを持った「〇〇主義者」と一方的に断ずるのが非生産的議論に陥るであろうことは、IIで論じたことから容認されよう。あえて試みれば、「プラグマティスト」と規定するのが適当であろう。
- 2) シューマッハーの外交構想は、アデナウアーの西欧統合政策（Westintegration）とカイザーの中立政策（Blockfreiheit）の中間に位置付けられる。詳しくは、Schwarz, *Vom Reich zur Bundesrepublik*, S. 481-565.
- 3) Edinger, *op. cit.*, pp. 80 f, 142 f.
- 4) Ritzel, a. a. O., S. 126-137.